

博物館だより

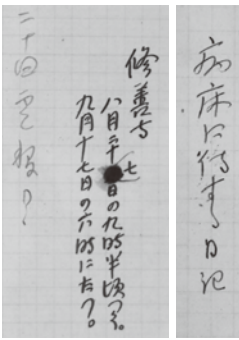
No.213

令和6年8月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行 福岡県京都郡みやこ町豊津 1122-13 TEL 0930-33-4666 FAX 0930-33-4667

博物館休館日カレンダー 2024年8月

資料解説 三四郎が演じたこの記録 大学を辞め専業作家となった漱石は、ヒット作を連発する一方、創作のプレッシャー故に酷い胃潰瘍を患います。明治43(一九一〇)年8月、転地療養を勧められ修善寺温泉(静岡県)に向かいますが、逗留先の旅館で大量吐血し一時臨死状態となりました。慌てた周囲は「ソウセキキトク」の電報を打ち、その報は犀川久富で結婚式の準備をしていた小宮の下にも届きました(8月25日)。



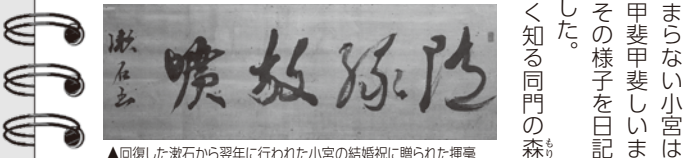
▲「修善寺日記」の表紙部分

◆博物館「イチオシ」逸品レポート この展示(&収蔵資料)「ココが見どころ、ココがツボ!!」 今年「みやこの先人」の一人、小宮豊隆の生誕140年の記念年です。漱石最愛の弟子にして小説『三四郎』のモデル・漱石研究の大家とされる小宮ですが、漱石の輝きが強烈過ぎて、残念ながら彼自身のことにはあまりよく知られていません。 この記念の年、「知の巨人」ともいふべき教養の人・小宮豊隆を当館注目の資料から調べてみませんか?

●資料名 小宮豊隆資料(第二次寄贈)一括のうち ①小宮豊隆所用携行手帳より「修善寺日記」 ②漱石揮毫「随縁放曠(ずいゑんほんくわん)」 ●データファイル 法量等...①1冊 ②1幅(額装書) 制作年代...明治43・44(一九一〇・一一)年 ポイント...漱石の闘病記録にして名作『三四郎』を偲ばせる史料 ●公開状況...①非公開 ②常設展示中

▲「修善寺日記」の表紙部分

▲病床の漱石に漸く面会できた8月30日から始まる「修善寺日記」



▲回復した漱石から翌年に行われた小宮の結婚祝に贈られた揮毫

◆講座・教室・催し物ガイド 8月の歴史講座 『漢詩紀行講座』 8月3日(土) 9時30分〜 『古文書講座』 8月10日(土) 10時〜 『古典かな講座』 8月17日(土) 9時30分〜 『みやこ学講座』 8月24日(土) 10時〜 ※日程等変更となる場合があります。 ※見学会等は別途ご案内します。 ◆夏休み企画展 『昭和の暮らしと風景展』 みやこ町ゆかりの有馬輝美、有馬美和子夫妻は、ミニチュア民具と紙粘土を素材とした各種人形を制作する人形作家で、特に「昭和」の日常風景を再現した作品を数多く手掛けています。今回の企画展では、細部まで見事に表現された農機具や、それを使う人々の細かい動きなどリアリティー溢れる作品を多数展示します。また開催期間中、みやこ町図書館で、有馬夫妻が制作した人形のミニ展示及び関連図書の展示を実施します。大人には懐かしさ、子どもには昭和の暮らしについて学ぶことができる展示となっていますので、夏休みを利用して是非、ご来館下さい。 ◆開催予定期間 令和6年9月1日(日)まで ●ギャラリー・トーク 実施日時 令和6年8月18日(日) ・午前の部 10時〜 ・午後の部 14時〜 実施場所 みやこ町歴史民俗博物館 講師 井上信隆 (宮館学芸員) 募集方法 午前・午後各30名の先着60名のみ参加可。参加希望者は電話による事前連絡が必要。



▲ファイルの閲覧には旧帆柱小の学習機を利用して頂きました

6月の業務日誌から

6月11日(火)から6日間、学芸員資格の取得を目指す土田嘉樹さん(八洲学園大学)の博物館実習を行いました。 社会人枠のリカレント学習の取組でしたが、実習者の旺盛な学習意欲に、館職員も大いに触発されるよい機会となりました。

6月21日(金)~7月19日(金)まで、館内ホールで酒盛栄一さん(犀川帆柱)の手作り地域史ファイル「古里の歴史と文化」を公開しました。ミニ展示の形でファイルを披露し、観覧者からは「よくまとめられているね」の声が寄せられました。



▲実習成果はミニ展示「証書類でたどる三四郎の歩み」にまとめました

# みやこの歴史発見伝 169

## 郡長正と 会津ゆかりの人々

### 会津若松市との交流について

みやこ町は、令和4年（2022）9月22日、福島県の会津若松市と「郡長正ゆかりの地交流都市宣言」を締結しました。これは150年以上前に、みやこ町豊津の地でわずか16歳の生涯を閉じた斗南藩（旧会津藩）出身の郡長正（1856～1871）を偲ぶ両自治体・住民の相互交流を目的として締結されたものです。今回は、この交流都市宣言のきっかけとなった郡長正と関係のある会津ゆかりの人物についてエピソードを交えてご紹介します。

### 会津戦争と萱野家

薩摩・長州・土佐藩で構成された新政府軍と旧江戸幕府軍及び会津藩を含む東北諸藩から成る旧幕府軍が戦ったのが戊辰戦争（1868年1月～1869年6月）です。各地で繰り広げられた戦いによって両軍合わせて8000名以上の戦死者を数える日本近代史上、最大の内戦となりました。中でも「会津戦争」とよばれる戦闘は、戊辰戦争のひとつの局面となったことから、現在の福島県会津若松市周辺では、女性や子どもを巻き込む市街戦が展開され、その悲劇が現在まで語り継

がれています。この戦いで会津藩は新政府軍に敗れますが、会津藩の家老であった萱野権兵衛は、いわれなき逆賊の汚名を負うことになり、藩の全責任をとって切腹します。

その後、会津藩の人々は極寒の青森県の下北半島に位置する斗南藩に移転になります。会津藩の再興のため、特に優秀な青年7名を選抜し、明治3年（1870年）に豊津藩（旧小倉藩）の藩校、育徳館（現在の育徳館高校）に留学させます。7名の中でも特に文武両道に秀でていたのが萱野権兵衛の次男「郡長正」です。しかし郡長正は翌年の明治4年（1871年）5月1日に育徳館の寮の一室で自ら命を絶つてしまいます。その原因は諸説みられますが、故郷を離れて「会津武士道」の精神を貫き16歳で果てた彼の志は、現在まで故郷の会津及びみやこ町で語り継がれ、両自治体にとってかけがえのない「交流の歴史」となっています。

### 「朝の連ドラ主人公」との関係

今から79年前の8月6日に人類史上初となる原子爆弾が広島に投下され、その3日後には、長崎にも



郡長正

投下されています。この10年後の昭和30年（1955）4月、アメリカの原爆投下を国際法違反とし、損害賠償を求めて訴訟が提起され、日本の裁判所で初めて「原爆投下は国際法違反」と明言した「原爆裁判」を担当したのが三淵嘉子（1914～1984）です。彼女は「日本初の女性弁護士の人」であり「日本初の女性判事および家庭裁判所長」になった人物で、連続テレビ小説『虎に翼』は彼女の生涯をドラマ化したものです。彼女は、この裁判の翌年、初代最高裁判所長官、三淵忠彦（1880～1950）の長男、三淵乾太郎（1906～1985）と再婚します。三淵忠彦の父、三淵隆衛は郡長正の父、萱野権兵衛の弟で、萱野権兵衛は忠彦の伯父にあたります。萱野家は会津藩の家老や奉行などを務める家系でしたが、萱野権兵衛の死後、家名断絶に伴い萱野家を継いだ長男を除いて「郡」や「三淵」の姓を名乗ることになりました。このように萱野権兵衛が抱いた萱野一族の再興への思いは、後に「司法の頂点」まで上り詰めた子孫によって成し遂げられました。

初めてカレーを食べた日本人  
夏のキャンプの定番メニューが「カレー」です。現在、「国民食」として子どもから大人まで好まれています。このカレーを初めて口にした日本人は会津出身の人物です。萱野権兵衛、郡長正と共に今も会津で語り継がれているのが「白虎隊の悲劇」です。白虎隊は、会津戦争をきっかけに10代の武家男子によって組織された部隊で、会津藩の敗色が濃くなる状況を見て飯盛山で自刃した悲劇が現在まで伝えられています。この白虎隊士の一人として新政府軍と戦った山川健次郎（1854～1931）は、会津戦争後の明治3年（1870）16歳の時にアメリカへの国費留学生に選ばれます。アメリカへ向かう船の中で提供された食事は、バターなどを用いた「西洋料理」であり、その芳香も彼の記録では「変なおい」と記載されており、これに加えてひどい酔酔になった彼は乗船後、全く食事を摂ることができませんでした。これを見かねた外国人船医が「ライスカレー」を勧めました。ご飯なら食べられるのでは？と考えたのがその理由でしたが、彼の記録によると「ご飯の上にあるドロドロしたものとはとても食べる気になれなかったので船医が用意した杏の砂糖漬けをおかずにご飯を食べて飢えを凌いだ」という記述をみることでわかります。諸説みられますが、彼が記したこの記述が現在確認できる資料の中で「日本人がカレーを食べた最古の記録」とみられています。現在の青年にとつてカレーは「おかわり！」必須の料理ですが、当時は「外国の奇妙な食べ物」であったことが伺えます。カレー（実際は飯）

を食べて飢えを克服した彼は無事アメリカに渡り、イェール大学で物理学の学位を取得しています。帰国後の明治12年（1879年）、日本人として初の物理学教授に就任します。その後、東京帝国大学（現在の東京大学）の総長を11年11か月務め歴代総長の最長在任を記録しています。また現在の九州大学の初代総長や、九州工業大学の初代総長を務めるなど、福岡県内でも教育に尽力した人物としても知られています。明治33年（1900）5月には「会津図書館共立会」を設立し、故郷の会津に図書館を建設する運動を展開しています。没後の昭和7年（1932）には、白虎隊として、会津戦争を戦った体験を記した『会津戊辰戦史』が出版され、数少ない元白虎隊員が記した貴重な記録に位置付けられています。郡長正、山川健次郎は共に16歳という若さで会津や国の代表として、各々の目的のため豊津やアメリカに旅立っていますが、会津藩はこの2名の他にも新政府で活躍した優秀な人材を輩出しています。また会津藩は、寛文3年（1663）に日本ではじめて老齢年金制度を創設するなど斬新な制度を確立した藩としても知られています。

郡長正の物語をきっかけに始まった会津若松との交流事業ですが、彼の精神は今後も両自治体の人々によって長く語り継がれていくことでしょう。

（井上信隆）